学習経験から観る作文に対する態度の移り変わり

―韓国人学習者のケース・スタディ―

木尾 一智

アブストラクト

作文の授業に目を向けてみると、日本語で書く作文は嫌いだとする学生が多い。また、母語での作文、日本語での作文を問わず、作文そのものが嫌いだとする学生も多い。では、なぜ作文は嫌われる傾向にあるのだろうか。先行研究を見てみると、安藤（1994）は、過去の学習の経験が現在の態度と関連しているとし、また安藤（2003）は、学習者の過去の学習背景を教師が知ることの必要性に触れている。このような観点から、ケース・スタディを研究方法とし、筆者は日本語学習者の作文に対する態度と意識を探るため、インタビュー調査を行なった。ケース・スタディにより学習者と学習とのかかわり方が作文に対する意識にどう結びついているのかを探り、態度を変えるきっかけとなる要因は何かを明らかにしていこうと考えたのである。調査データ分析の結果、次の 7 つのカテゴリーが考えられた。①過去の作文経験②日本留学試験③母語で書く作文に対する気持ち④書くことの必要性⑤教師とのかかわり、見てくれる人の存在⑥現在の作文に対する気持ち⑦将来の目標の 7 つである。

キータ―ム：作文教育、作文経験、学習態度、学習背景、日本留学試験

1. はじめに

日本語学習者の作文に対する態度に関しては、小山（2004）では、多くの学生は「作文」を嫌う傾向があり、母語でも苦手ならばそれも仕方ないが、そうでない学生でも日本語で書く作文は嫌いだという者が多いとしている。倉地（1994）でも「日本語で文章を書くのは苦手」、「作文は義務だから書くが、書かなくてもよいならば書きたくない」といった学生からの声が挙がっている。実際に筆者も作文の授業を担当したことがあり、日本語を学ぶ学生に次の授業は作文の授業であるということを告げ、いざ作文を始めようとすると、決まって「書くのは苦手」、「宿題にして」、「めんどくさい」、「書くことがない」などといった非難の声が挙がる。常日頃から、どうして作文を書くとなると、これだけ非難の声が挙がり、真面目な学生であってもしぶしぶやるしかないといった表情を見せ、なぜ意欲的に取り組むことができないのだろうかと感じていた。

では、なぜ学生は作文を敬遠し、嫌う傾向にあるのだろうか。この作文に対する好き・嫌いといった態度の観点から学生個人が抱える過去の経験、学習背景などをたどり、なぜ好きなのか、嫌いなのかを明らかにしていきたい。

2. 先行研究

安藤（1994）は、過去の学習の経験が現在の態度と関連しているとしている。また、安藤（2003）は、教師は学習者の過去の学習背景を知っておく必要があると述べ、特に海外で学んだ学習者は、日本語への接触が学習場面でしか生じない場合があるため、選択された学習方法・学習環境が日本語習得の外枠となって、能力に偏りをもたらすことがあるとしている。

鹿毛（2004）も情動体験は現在進行形の行為のあり方に強い影響を及ぼし、また、過去の情動体験の積み重ねが現在、あるいは将来の行為に影響することも少なくないと述べ、横山・木田・久保田（2004）においても学習者の過去の学習経験、文化的背景が学習者のビリーフに影響し、それが言語習得と学習ストラテジーの選択や使用に影響すると述べられている。

このような指摘から、学習者の作文に対する態度は現在に至るまでに様々な過程を経て成り立っているのだと考えら

れる。ただ好きか嫌いか、といった二者択一的で平面的なものではなく、過去、現在、未来の時間軸で見た場合、ただ好き、嫌いといったその場限りの感情だけではない大きな変化、小さな変化があるのではないかと思われる。

こうした日本語作文教育におけるモティベーションや態度、不安、また、学習背景などの観点からの研究は少ないように思われる。本研究では主に好きなのはなぜ、嫌いなのはなぜ、という態度の観点から、そこに至るまでの学習背景、経験、作文教育とのかかわり方はどのようなものであったのかということを見ていき、どのような要因が現在の態度に影響を及ぼしているのか、そして、それに対して教師には何ができるのかを考えていきたい。

3. 研究目的

①学習者と学習とのかかわり方が作文に対する意識にどう結びついているのかを探る。

②作文がなぜ好きか、嫌いなのか。また、何がそうさせているのか。その理由、背景を探る。また、両者の差異は何かを見る。

③作文に対する抵抗感をなくす、軽減させるためには学生と教師の双方に何が必要であるかを探る。

④態度を変えるきっかけとなる要因は何かを明らかにする。

4. 研究方法

研究方法にはケース・スタディを用いることとした。Merriam（1998）は「どのようにして」「なぜ」という問いかけに対してケース・スタディはきわめて有効であると指摘しており、プロセスに関心のある者にはとくに向いているデザインであると述べている。さらには他の方法ではアクセスが難しい現象や知識を明らかにするのがケース・スタディの持ち味であるとしている。また、LOKUGAMAGE（2007）では、ある状況について徹底的な理解を得るために、そして関係者による意味づけを理解するために質的ケース・スタディは有効な研究方法であり、基本的に限定された時間や空間で、集中してデータを集められると述べられている。

本研究の場合、学習者と作文とのかかわり方、作文に対して現在持っている態度の理由、またその背景など、調査対象者がたどってきたプロセスを探ることを目的としており、また調査を行ったフィールドについても、日本語学校に調査協力をしていただいているので、時間や場所に限りがある。従って、本研究ではケース・スタディを用いることとした。

5. 予備調査

大阪市内の日本語学校に調査協力をしていただいた。上級レベルの学生の中から、作文が好きな学生（中国人女性Aさん）、どちらでもない学生（韓国人男性Bさん）、嫌いな学生（中国人女性Cさん）の3名を紹介していただき、半構造化インタビュー（Merriam 1998）を行なった。作文が好き、どちらでもない、嫌いというのは学生の自己申告である。

予め知らせておくこととして、次の4点を調査協力者に伝えた。①調査者の動機と意図、そして調査の目的、②仮名を用いることによる回答者のプライバシー保護、③研究内容に対する最終決定権を持つ者の決定、④予定されているインタビューの時間、場所、回数に関する実施計画の4点である（Merriam 1998:122参照）。

インタビューの質問項目として情意面、ストラテジー、学習背景・経験、教師に求めるものの4つの観点を立て、それぞれについて質問を行なった。インタビューは3名とも2回行なった。1回目のインタビュー時間はAさん、約55分、Bさん、約70分、Cさん、約55分であった。そして、2回目のインタビューまでに「どうして作文が好きなのか／嫌いなのか」というテーマで800字程度の作文を書いてきてもらった。これはインタビューの質問内容について意識化してもらい、さらに、過去の学習経験、背景を振り返ってもらうために行なった。また、刺激提示による回顧法、レポート法の観点からもこの工程を取り入れることとした。

2回目のインタビューは前回のインタビューの内容から、もう少し具体的に聞きたいところ、分かりにくかったところなどを挙げ、質問を作成し、インタビューを行なった。前回のインタビューを文字起こししたものと書いてきてくれた作文の内容に触れながら内容を確認した。2回目のインタビュー時間はAさん、Bさん、Cさんとも約60分であった。インタビューは全てICレコーダーとMDレコーダーに録音している。紙幅の関係で、今回はこの3名のうち、韓国人男性のBさんを取り上げ、見ていくこととする。Aさん、Cさんのケースについては稿をあらためる予定である。

6. 分析

6.1 図式化

分析は一度データを時系列に沿って表にまとめ、その後 KJ 法のような要領で、全てのデータをカード化し、似た内容のカードを一つのまとまりにして、７つのカテゴリーを作った。この 7 つのカテゴリーを時系列に沿って、並べたものが図１である。

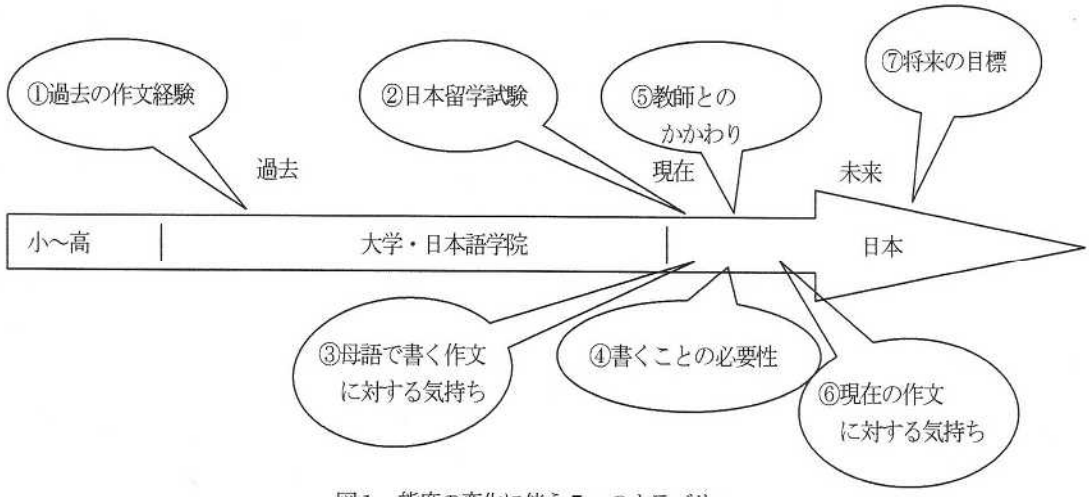

図１　態度の変化に伴う７つのカテゴリー

6.2 考察

各カテゴリーについて、時系列に沿って述べていくこととする。文中の斜体で表した部分は B さんのインタビュー中の発話と作文の記述を引用したものである。引用部分の最後に付け加えられている括弧内の記述はインタビューからの引用であるのか、作文からの引用であるのかを示している。

①過去の作文経験

学習背景・経験についての質問から過去の作文経験についての回答を得ることができた。自国において作文を書くことが全くといっていいほどなく、その作文を書く経験の少なさから、作文が嫌いになったという回答内容であった。

> *慣れていると、作文を書くときに拒否感がないと思うんですけど、経験がないから拒否をしてしまうと思うんです。日本語でも同じだと思うんですけど、最初日本人と話す機会があったら、恐さがどんどんなくなるじゃないですか。経験がない人は最初恐いと思うんですけど、そういうことと同じだと思うんです。(Interview 1)*

小学校時代も日記や夏休みの宿題程度で、中学、高校でも受験中心であったため、作文の機会というのはなかったようである。大学に入ってからもレポートなどはコピーペーストで済ましてしまうため、自力では書かなかったようである。日本語学院で日本語を勉強していた時期でさえ、所属していたクラスが会話クラスであったため、作文の機会はなかったようである。こうした問題もあり、昔から作文を書くときは頭の中にある考えを表現するのが苦手で、書いてもうまく書けない、必要なことでもない、面倒くさいといった悪循環に陥り、作文が嫌いになっていったということである。

②日本留学試験

しかし、日本に来てから少しずつ気持ちに変化が表われてきている。

日本へ来て考えがちょっと変わりました。一週二時間の留学試験対策の授業ですが、韓国で感じた面倒くさくてやりたくない気持ちよりやってみたい気持ちのほうが強いです。（作文）

この気持ちの変化のきっかけとなったのは、日本留学試験の記述試験のための作文のようである。中でも、漢字、語彙に関心を持っているようである。「いろんなことを表現する語彙力がほしい」「漢字が弱い」「漢字は難しいけど、かっこいい」など。また、この気持ちの変化は態度だけでなく、やる気、自己肯定感といったものにまで影響を及ぼしていることが読み取れる。

作文をする時文法と漢字が必ず必要になるからできなかったことができた時の喜びを味わっている途中だと思います。（作文）

日本へ来て作文に興味を持つようになった理由は耳で覚えた日本語を字という形で表現することが楽しいからです。（作文）

作文を書く時夢中になって 20 分の時間がすぐに経ってしまうから読解の時間で疲れた気分を癒してくれます。（作文）

と述べているように、自国で日本語を学習していたときは、会話のみであったので、作文という取り組みを通して、字という形で漢字や語彙を表現することに楽しさを感じているように見受けられる。また、日本語学校で行なわれている作文という取り組みが作文に対する意識を刺激し、非常にいい変化が生じているということを窺い知ることができる。この日本語学校で行なわれている作文は日本留学試験の記述試験のための作文なのでAとBのどちらかの立場をとって意見を述べる、意見文である。そういった意見文ではなく、自分が書きたいと思う、自分の気持ちを表現できる随筆にも取り組んでみたいといった回答も見られた。

③母語で書く作文に対する気持ち

一方、母語で書く作文に対する気持ちについての回答を得た。

まず一度韓国語で全部書いたあとで、日本語にするんだったら、そこまで嫌とは思わないですけど、何らかの趣味の活動でですね、韓国語の作文をしたら、嫌です。（Interview 2）

このように、第二言語である日本語作文に関しては、先ほども見たように非常にいい気持ちの変化が見られるが、第一言語である韓国語作文においては消極的な態度である。やはり自国における作文の経験が影響しているものと思われる。

④書くことの必要性

また、B さんは作文に取り組むことの必要性についても述べてくれている。それは話すことと結びつけて述べられている。「一般の人より多く作文、論文を書いた人の話は説得力がある」「話をよくしようと思ったらちゃんとやさしい表現でできるようにならないといけない」などの回答があり、それは次の発話に集約できる。

別々じゃなくてですね、自分の考えを整理して、同じ説得力がたぶん深くなるんじゃないですか。だから、整理するためには書きながら、整理することが必要だと思うんです。（Interview 1）

つまり、説得力のある話をするためには考えを整理させないといけないので、作文はそのためのツールであると述べ

ていると思われる。この作文というツールを用いて、考えを整理し、相手に伝えやすくすることが話すこと、会話能力にもつながると考えているのであろう。自国にいるときは作文を書くことに対し、必要性を見出せずにいたが、気持ちの変化、意識の変化とともに自分なりに作文というものの必要性を見出している。

⑤教師とのかかわり、見てくれる人の存在

教師に求めるものについての質問から教師とのかかわりについての回答が得られた。「書いても見てくれる人がいない」「悪い癖がつかないように直してほしい」「アドバイスがほしい」など、作文を書いたあと、きちんとチェックとフィードバックをしてくれる人が必要であると述べている。また、筆者が「なぜそういう人が必要なんですか」といった質問をすると次のような答えが返ってきた。

> *いっぱい書けても、修正してくれる人がいたとしたら、ありがたく、一生懸命書くんだと思うんですけど。（Interview 2）*

さらに、授業時間や教師に関する問題点として「時間がない」「じっくり書けない」「やってもやりっぱなし」などといった点が挙げられていた。これはカリキュラム上の問題や教師側の負担の問題への言及であろう。これらの問題にかかわって、「教師は忙しいので、気楽に添削のお願いができない」などの回答もあった。

こうした、教師とのやり取りにも学生は気を配っており、そうしたインタラクションが学生のやる気を高め、いい経験として蓄積され、その後の態度にも影響を与えるのではないかと思われる。また、カリキュラム上の問題、時間の問題、作文の添削の負担が大きいなどの教師側の問題点が学生にも影響し、それが学生から作文とかかわる機会を奪い、作文が学生に敬遠される原因の一つになっているということも考えられる。

⑥現在の作文に対する気持ち

ここまで見てきたように、自国においては嫌いだった作文だが、日本に来てからというもの、作文に対する意識に変化が見られるようになったようである。情意面についての質問から現在の作文に対する気持ちに関する回答が得られた。「個人的には楽しいですね」「頭の中にある日本語を書くことが楽しい」「字という形で表現することがうれしい」「できないことができてうれしい」など、日本の日本語学校で学ぶ中で非常に意欲的な態度に変化しているのがわかる。「字という形で表現することがうれしい」という回答は先でも述べたように作文に興味を持つきっかけにもなっている。これらの回答を見ていると自国にいたときに学んでいた日本語学院では会話を中心に学んでいたということなので、そうした経験も日本に来てからの作文との学習のかかわりにおいて影響しているのではないかと思われた。しかしながら、

> *嫌ではないけど、苦手。好きでもないけど嫌でもない。これが今作文に関する私の気持ちです。（作文）*

と述べているように、作文に対して非常に意欲的であることは確かであるが、「好き」という態度を示しているというわけではない。

現在の気持ちの変化に至るきっかけを作ってくれたのは、日本に来てから取り組んだ日本留学試験の記述試験のための作文である。そして、それを支えているのは、次に述べる将来の目標である。

⑦将来の目標

そもそも日本に来ることになったのは将来の就職のことを考えてのことのようである。国内での就職ではなく、日本の大学院に入り、その後日本の会社に就職することを希望している。こうした目的意識が現在の態度、やる気を支え、作文だけに留まらず、日本語学習、その他の様々な活動に活かされているのだと思われる。今回作文についての次のよう

な回答を得ている。

学校で書きながら思ってたんですけど、けっこうちゃんと書けたものじゃなくて、下手なものが多いんですね。で、目指すものが大学院なら、もっとうまくならないと思っています。韓国ではそういう考え全然なかったから。（Interview 2）

また、次のような回答も見られた。

大学院卒業して、自分の考えちゃんと話せないとか、そういうことも恥ずかしいんじゃないですか。で、書くとき、自分の考えが整理することができるんだと、そういうことを考えて、書くことも大事じゃないかと、練習しなきゃだめだと、そう思いますね。（Interview 2）

大学院を目指すのであれば、書くということはしっかりとできるようにならないといけない、レポートや論文といった書く機会が多くなるということもしっかりと見据えて、納得のできる程度にまで書けるようにならなければいけないという B さんの目的意識の高さが窺える。さらに次のような回答があった。

今はもっと大事ですね。やっぱり。将来の職場を決めるときも作文が大事だと感じているから。もうちょっと真剣にしないとだめっていうか、もうちょっと勉強しないとだめっていうか、そういう考えは確かにあるんですね。（Interview 2）

以上の回答から、大学院卒業後の就職のことまで見据えながら、日本語学習、そして作文に取り組んでいるということがわかる。

7. まとめと今後の課題

①から⑦のカテゴリーを見てきたが、大学院、就職ということを出発点として、日本に来て、作文と出会ったことを転換期とし、少しずつ作文に対する意識に変化が生まれている。そして、大学院、就職という目標を達成するためにはどうすればよいか、また、何をすればよいかを考えることを通して作文というものに注目したとき、作文はしっかりと書けるようになっていなければならないという思いが芽生えている。なぜならば、作文をツールとして、自分の考えをきちんと相手に伝えられるようにならなければならないからである。それに伴い、作文は自分の頭の中にある言葉を字という形で表現できるので、今までできなかったことができるようになる喜びも味わうことができるようになっている。それが現在の作文に対する態度につながり、やる気も高まり、より一層作文に取り組むことができるといった、一連の流れが生まれている。

今後の課題としては、今回はＢさんのみの分析であるため、今回取り上げることができなかったＡさん、Ｃさんのケースを分析し、その 2 つのケースと今回取り上げたＢさんのケースを含め、3 つのケースの結果と、それらを比較したものを今回分析したような形にまとめ、本研究の目的である 4 点についての要因を抽出し、教師が学生にできることは何かを考えていきたい。

付記

本稿は第 44 回関西 OPI 研究会(現:日本語プロフィシェンシー研究会) (2009 年 1 月 10 日於京都外国語大学)での発表内容に加筆し、修正をしたものである。

参考文献

安藤清志(1995) 「態度と態度変化」 安藤清志・大坊郁夫・池田謙一編著『現代社会心理学 4―社会心理学』 pp.60-74 岩波書店

安藤淑子(1994) 「日本語教育における作文指導のための一研究 ―Writer's Block に関する調査―」『平成 6 年度日本語教育学会大会予稿集』pp.117-120 日本語教育学会

安藤淑子(2003) 「中級作文に見られる日本語『書き言葉』習得の特徴-学習背景による能力の偏り及び第一言語における言語能力との関わり-」『山梨県立女子短期大学紀要』 第 36 号 pp.101-106 山梨県立女子短期大学紀要委員会

小山真理(2004)「日本語の作文指導に関する一考察」『文化女子大学紀要. 人文. 社会科学研究』 第 12 号 pp.75-88 文化女子大学

川喜田二郎(1967) 『発想法』 中央公論社

倉地暁美(1994) 「ジャーナル・アプローチの展開 -日本語・日本事情教育の新しい方向に向けて-」『日本語教育』第 82 号 pp.123-133 日本語教育学会

佐藤郁哉(2008) 『質的データ分析法－原理・方法・実践－』 新曜社

鹿毛雅治(2004) 「『動機づけ研究』へのいざない」 上淵寿編著『動機づけ研究の最前線』 pp.1-28 北大路書房

竹口智之(2006) 「外国語学習における『態度』の影響」『教育学研究紀要』 第 52 号 pp.556-561 中国四国教育学会

Flick,U. (2000) Qualitative Forschung. Rowohlt.TB-V.,Rnb. 小田博志他訳(2002)『質的研究入門-＜人間科学＞のための方法論』春秋社

Merriam,S.B. (1998) Qualitative Research and Case Study Application in Education. 堀薫夫・久保真人・成島美弥訳(2004) 『質的調査法入門―教育における調査法とケース・スタディ―』ミネルヴァ書房

横山紀子・木田真理・久保田美子(2004)「日本語能力試験と OPI の相関関係による運用分析--技能バランスに焦点を当てて」『第二言語としての日本語の習得研究』pp.81-99 凡人社

LOKUGAMAGE Samanthika (2007) 「目標言語を第 2 言語とする教師とその実践－スリランカの日本語教師のケース・スタディー－」『阪大日本語研究』 第 19 号 pp.193-221 大阪大学大学院文学研究科日本語学講座